

イザヤ書37章1節 「主の宮に入る人」

1A 祈りの要請 1

1B 宮清め

2B 民と王の一体

3B 生ける神の誹り

2A 祈っている相手 14-20

1B 手紙を広げるヒゼキヤ

2B 地上のすべての王国の神

3B 偶像の無力さ

4B 神の栄光

本文

イザヤ書 37 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは 35 章まで来ました。午後に 36 章から 39 章までを眺めてみたいと思います。今朝は、37 章にある話に注目しますが、初めに 1 節をお読みします。「ヒゼキヤ王は、これを聞いて、自分の衣を裂き、荒布を身にまとして、主の宮にはいった。」彼は、衣を裂き、荒布をまとうという、悲しみと心の痛みと嘆きを表していますが、しかし、彼は主の宮の中に入りました。この「主の宮の中に入る」ということについて見ていきたいと思えます。

1A 祈りの要請 1

イザヤ書 36 章から 39 章はついに、これまで私たちが見てきた、アッシリヤによるエルサレム包囲の歴史的記述です。この時の王がヒゼキヤです。彼こそが、イザヤのこれまで語った預言の言葉に心を留めていた者であり、これまでの主からの言葉は彼の心の中に葛藤をも表していたと言っても過言ではありません。彼はイザヤの言葉にしたがって、主に従いながらも、それでもアッシリヤに対してエジプトに頼って対抗しようとする過ちを犯してしまいました。しかし、彼が完全に心が押しつぶされてしまった時に、主が憐れんでくださり、アッシリヤのところにすばやくやってきてくださり、彼らを霧が晴れるように一気に滅ぼしてくださったのです。ヒゼキヤの姿は、まさに御言葉に取り組むキリスト者の、誠実な姿と言ってよいでしょう。

アッシリヤというのは、私たちにとってどういう存在でしょうか？それは、「自分ではどうすることもできない、ただ主なる神のみに拠り頼むことによるのみ救われることのできる状況」と言ったらよいでしょう。ちょうど、敵によって外堀が埋められ、内濠までもが埋められていき、自分の頼りにしていたもの、守ってくれていたものがなくなっていくように、ヒゼキヤが王の時に、アッシリヤ軍がその町を取り囲みました。私たちがこれまで頼ってきたものが取られた時、さらにどう守られるか考えて、それで次の対策を練ります。けれども、それもうまくいかない。次々と、自分の願っている

方向から離れたことが起こってくる。そこで、ただ主の前に出ることが求められるのですが、そこに至るまで、私たちは、自分で自分を救おうとしてしまいます。ある時は誰かに助けを呼びます。また、ある時はその現実から目を逸らして、世の楽しみへと心が傾きます。しかし、問題は過ぎ去りません。こうして、自分で自分を救おうとする意欲が打ち落とされていきます。

ヒゼキヤは、自分が王となって第六年目に、北イスラエルのサマリヤがアッシリヤに取られました。そして、アッシリヤの王セナケリブはユダにも入り、その城壁の町々に対して陣を敷きました。それでヒゼキヤは奮い立ちます。町の外にギホンの泉があるのですが、そこをふさぎました。そして、地下水道を掘っていき、シロアムの池にまでつなげ、城壁内で水の確保ができるようにしました。そして崩れていた城壁を全部立て直し、大量の投げ槍と盾も用意しました。しかし、セナケリブはユダの町々を次々に倒して、ついにラキシユという要塞の町を攻め取りました。そこを取られたら、エルサレムは目と鼻の先です。それでヒゼキヤは、銀や金を貢物にしてアッシリヤの王に、引き上げてくれるように懇願しました。

ところが、それでもアッシリヤはやってきたのです。そして、エルサレムを取り囲み、王はラブ・シヤケを遣わして、脅しをかけます。それが、もっぱらヒゼキヤの主への信頼を取り下げようとした内容でした。主を信じるということ、これを何とかして潰してしまおうとするのが、敵の仕業です。ラブ・シケはまず、ヒゼキヤが主に拠り頼むといいながら、エジプトに頼ったことを責めました。主に拠り頼むとしても、そうした妥協をしてしまった、その信仰の足りないところを、ことさらに責め立てます。次に、主に拠り頼めと言って、非常に排他的になっていることを責めました。「主に頼るということ以外に、他の方法があるだろう。とても偏狭な考えだ、心が狭く、頭も悪い。」という、非難を私たちも信仰を持っていれば受けます。それから、「主がアッシリヤによってエルサレムを滅ぼすように命じておられるのだ。」と言って、なんと主の御名を使ってエルサレムの滅亡を説いています。これは敵の常套手段です。罪の自覚を与えるのは聖霊ですが、罪に責め立てられ、もう信仰者に値しないと落ち込ませるのが、サタンの仕業、兄弟の告発をする者の姿です。

そしてエルサレムの住民に対しては、ヒゼキヤの言葉に騙されるな、あなたがたが降伏したら、とても良い生活が待っている、アッシリヤが提供するのだと言います。信仰を持つことによって、物質的な豊かさがそがれていくことがありますから、これは大きな誘惑です。そして、このラブ・シケの言葉を聞いた、三人の側近が王のところに戻り、王に伝えました。

1B 宮清め

そして王は、衣を裂いて、荒布を身にまといましたが、そこで彼が行なったのは、「主の宮にはいった」ということです。そうです、そこは主のおられるところ、主に仕えるところ、主から聞くところ、主にお会いするところです。使徒パウロは教会について、「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか。(1コリント 3:16)」と言いました。悲しみに押しつぶされるのではなく、そのまま悲しみの心をもって主のところに出ていったのです。

これは、ヒゼキヤがこれまでずっと、霊的な生活を習慣としていたからに他なりません。彼が王に即位したときに初めて行ったのは、「主の宮の戸を開き、これらを修理した。(2歴代 29:3)」というところから始めます。そして、父アハズが行なった神殿の中での偶像礼拝を一切取り除き、宮を清めるのです。これはまさに、主の前に出ていくために、自分が他に拠り頼んでいた事柄を捨てていくことです。偶像とは、私たちが造られた神以外のものを神々とするということです。それらの多くは実は、元々良いものでありました。当時の偶像礼拝は、例えばバアル信仰がありました。農耕において、豊穡をもたらす神としてあがめられていました。それ自体は良いことです。しかし、それを第一に求めるならば、その人はまことの神ではなくバアルを拝んでいるのです。ですから、まことの天地を造られた神以外の、何か自分に安心を与えるものがあれば、それがそのまま偶像であります。

ですから、ヒゼキヤが行なった宮清めは、主の前に出ていく中で私たちの心の中にある偶像を捨てていく行為です。多くの人が、多くの偶像を持っています。自分に身近な人との関係がそれかもしれません。イエス様は、自分よりも父や母、夫や妻、兄弟や姉妹を愛する者は、わたしの弟子にふさわしくないとされました。自分の財産かもしれません。安定した生活があり、主に従おうとしたら、それが妨げになっているかもしれません。誰かを恨んでいたり、妬んでいたりにしているかもしれません。それがあまりにも自分の一部になっているので、主の命令を聞く時に心が痛んでいるかもしれません。こうした、心の中にある偶像を取り除くのです。

そしてヒゼキヤは、祭司たちに祭壇の上でいけにえを捧げさせました。これは、主に自分をささげていく行為です。神の恵みにしたがって、献身する行為であります。つまり、キリストが罪の供え物となってくださった。キリストが命となってくださった。こうした恵みに感動して、自らを主に捧げていくことです。ですから、自分の古いものを捨てながら、キリストを選び取っていくのであります。そして、ヒゼキヤは過越の祭りも復興させました。ユダだけでなく、アッシリヤのものとされていた北イスラエルにも人々を送って、エルサレムで祭りに集うようにさせました。このように、主の宮に対する情熱が非常に強かったのです。

それで、このような危機が起こった時に、どうしようもなくなった時に、自分の行ける所は主の宮であることを知っていたのです。しばしば、困った時の神頼み、という言葉がありますね。その神は誰でしょうか？まことの神ではありません。同じように、普段から神の宮のことを慕い、主への礼拝を慕い求めていなければ、神の名を唱えてもその方はまことの神ではなく、偽りの神、偶像になってしまっています。日頃から主の前に出て、自分のものを捨てていく、そして主の前に出て、自分自身を捧げていくという行為を行なっているからこそ、祈るときにまことの神に祈ることができます。

2B 民と王の一体

そしてヒゼキヤは、自分自身だけでなく、民全体に主に拠り頼むように仕向けていきました。ヒゼキヤは、祭司やレビ人が神の律法に専念することができるように、王の財産からいけにえのための費用を出しました。そしてエルサレムの住民にも、彼らの生活を支えるために什一の捧げ物を

するように命じました。こうやって、すべての民が神の事柄に関わることができるようにしたのです。

したがって、ラブ・シャケが脅しの言葉をかけた時に、彼らはぶれませんでした。彼が、ユダの民の言葉、ヘブル語で話していたので、三人の王の側近は民が理解してしまうから、アラム語で話してほしいと言いました。ところが、ラブ・シャケはなおのこと住民に対してヘブライ語で話して、「ヒゼキヤの言うことを聞くな。」と唆したのです。けれどもすばらしいのは、36章21節です、「しかし人々は黙っており、彼に一言も答えなかった。「彼に答えるな。」というのが、王の命令だったからである。」敵は何とかして、私たちが語ろうとさせます。蛇がエバに対して、疑いをかけさせ、そしてエバが返答して話し続けたので、彼女は惑わされました。しかし民は、王の言いつけどおりにしたのです。

したがって、私たちは霊的に一つになっている必要があります。ある時はこの教会へ、またある時はあの教会へ、ということをしていけば、自分の見聞は広がるかもしれませんが、その教会にある共同体には入れていませんね。同じように共に集まって主を礼拝しているからこそ、そこに一つ思いが与えられます。そして一つ思いが与えられているからこそ、私たちはヒゼキヤと同じように主の宮に入ることができます。

3B 生ける神の誹り

そしてヒゼキヤは、主の宮に入ってから、自分の思いを預言者イザヤに伝えます。先ほどの側近の他に、祭司たちも差し向けて、イザヤに伝えます。「きょうは、苦難と、懲らしめと、侮辱の日です。」と言います。けれども、主がラブ・シャケの言葉を聞かれた、そして、「生ける神をそしるために彼を遣わしたのです。あなたの神、主は、その聞かれたことばを責められますが、あなたはまだいる残りの民のため、祈りをささげてください。」と言いました(37:4)。ヒゼキヤは分かっていました、これは自分自身に対する誹りではない、自分が主に拠り頼もうとしているから責め立てているおとだ、つまり、これは主ご自身に対する誹りなのだ、ということです。

主の宮の中に入る人たちの間では、自分の身に起こることで人々が自分に対してしてくることは、その人自身が主との関係の中に問題があるからである、ということに気づきます。もちろん、私たちは誰かが自分に何かをしてきた、ということ、すべて迫害だと言って、そこで語られているかもしれない主からの声を聞き逃してはいけません。けれども、往々にしてラブ・シェケがヒゼキヤの献身を叩いているのは、とどのつまり、アッシリヤ自身が主なる神に対して高慢になっているからです。他の神々を我々は倒したからこそ、その国々を打ち倒すことができたのに、エルサレムの神はそうではないというのか？という高ぶりがあったのです。使徒パウロが回心する前に、キリスト者を迫害していましたが、イエス様が現れた時は「なぜわたしを迫害しているのか。」と問われました。それは、パウロがキリスト者を迫害している中で、実は彼自身が神に対抗していたからです。

2A 祈っている相手 14-20

そしてイザヤはヒゼキヤに、神の言葉を伝えました。アッシリヤの王は攻めてくることはない、恐れるな。彼は、自分の国に引き揚げる。そして、わたしは彼を殺す。」と言われました。はたして、エチオピア人の王が攻めてきた話を聞いたので、出ていきましたが、なんと彼は直接、ヒゼキヤに手紙を送ります。その手紙が、直接的にエルサレムの神を引き落とすものでした。他の神々を我々は倒したのに、なぜエルサレムの神がお前たちを救えようか、という内容です。

1B 手紙を広げるヒゼキヤ

そして驚くべきことをヒゼキヤは行ないました。14節を見てください、「ヒゼキヤは、使者の手からその手紙を受け取り、それを読み、主の宮に上って行って、それを主の前に広げた。」主の宮に入っただけでなく、そこで手紙を広げたのです。これは言うまでもなく、主ご自身に手紙を読んでいたかたのために行ったことでした。

敵の仕業はこれできないようにさせるものです。つまり、自分自身で解決しなければいけない、主にすべて自分の思い煩いを知っていただくことは、自分がしっかりと主を信じていないからだ。自分がしっかりして、それで主に拠り頼まなければ、主を悲しませることになる。「自分を助けて、それで主が助けてくださる。」という哲学です。しかし、聖書はその反対を勧めています。「あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。(1ペテロ 5:8)」

サタンは、「あなたの中にその思い煩いを抱え込むのだ。」と教えます。私は信仰をもって間もなかった時に、間違っって異端の教えを奉ずる教会に一時期通ってしまいました。まさにサタンを見た思いでした。そこが異端だと分かった後も、「自分自身で解決しなければ、他のクリスチャンに祈ってもらおうとか、人を介してはいけません。」という思いに駆られていました。けれども踏ん張って、祈り会に参加したのです。そうしたら、そこで祈っておられるある人の、拙いようにさえ聞こえる祈りで、私の心が洗い流されたのを覚えています。家庭内暴力においても、その被害者は「自分が悪いのだ。自分自身で解決しなければいけないのだ。」というように仕向けられています、そのような操作を受けているからです。ですから、手紙をそのまま主に読んでいただくような姿勢、頼り切ってしまう姿勢が必要です。

2B 地上のすべての王国の神

そしてヒゼキヤの祈りが、優れています。何が優れているかと言いますと、だれに祈っているかを明らかにしていることです。16節です、「ケルビムの上に座しておられるイスラエルの神、万軍の主よ。ただ、あなただけが、地のすべての王国の神です。あなたが天と地を造られました。」主なる神を、主なる神として見ていく、この行為だけで、私たちに信仰が与えられます。

イエス様は、「天にいます私たちの父よ。」という呼びかけで祈りなさいと命じられました。そこか

ら出てくる思いは、敬いです。父であれば、敬う存在です。だから、「御名があがめられますように。」という祈りにつながります。また父は養う存在です。だから、「日ごとの糧をきょうも与えてください。」と祈れます。このように、誰に対して祈っているのか明らかにすることによって、私たちは次に何を祈ることができるのかが分かるのです。

ここでは、「ケルビムの上に座しておられる」とありますが、ケルビムは天の御座の前で主に礼拝している天使であります。つまり、主は天におられて、地上の被造物の中に限定されていないことを知ります。私たちがどんな苦境に陥っても、それでも主は天におられるので、そのことをも支配して、主権を持っておられるのです。そして、「万軍の主」と呼んでいます。これは天使の軍勢のことです。霊の戦いの総司令官が、主ご自身です。つまり、物理的な力、血肉の武器ではなく、御霊によって主は御力を表すことを知ります。私たちは目に見えるものに注目してしまいがちですが、目に見えないものこそが目に見える世界を支配しているのです。

そして、「地のすべての王国の神」と言っています。アッシリヤが他の国の神々とエルサレムの神を同列に並べましたが、いいえ、すべての王国の神です。したがって、「これは、アメリカ的である。」という言い訳はしないのです。「ここは日本だから、そう言われても、うまくいかないよ。」であるとか、まるで日本には他の神々がいて、キリストの神は関係ないかのように話すのです。いいえ、キリストは日本の救い主でもあられます。同じ神であられます、すべての国々の王であられる方なのです。そして最後に、「あなたが天と地を造られました。」と言っています。この一言さえ信じていれば、私たちはいま立ちあがる困難を、神には取り除くことができないということはできなくなります。

3B 偶像の無力さ

そして他の国々が拝んでいるのは、「人の手の細工、木や石にすぎなかった」と述べています。これらの拠り頼んでいるものが、偶像にしてしまっているものがどれだけ弱々しいものなのか、無力なものなのか、私たちは知らないといけませんね。

4B 神の栄光

そしてこれらのことが、「地のすべての王国は、あなただけが主であることを知りましょう。(20節)」と述べています。祈りを主が聞かれるのは、そのことによって主ご自身の名が高められるからです。祈りというもの、その祈りが答えられるというものは、主の名が高められるからです。「ヨハネ:13 またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましょう。父が子によって栄光をお受けになるためです。」主はみなさんの祈りを聞いて、その求めることをかなえたいと願っておられます。それは、ご自身によって父の栄光が現れるからです。祈りが聞かれる教会には、主の栄光が満ちています。私たちが、祈らない訳にはいきません。